

桜井三枝子 著

『グローバル化時代を生きるマヤの人々：
宗教・文化・社会（大阪経済大学研究叢書第68冊）』

明石書店 2010年2月 334ページ

本書は、文化人類学者である筆者が、グアテマラを中心に、マヤ先住民の宗教・文化、社会に関する調査研究を重ねてきた成果の集大成となっている。

本書の問題意識は大きく以下の2点がある。第1に、スペインの征服・殖民政策下、先住民マヤ文化全体に中世カトリシズムが移植された結果、信仰形態において、現在のマヤ村落にいかなる習合現象や文化変容が生起し継続されているのか。第2に、内戦、和平協定締結（1996年）など、めまぐるしい社会状況の変化に対応して、マヤの人々の意識がいかに変容してきたのか。この2つの問題意識に基づき、本書は第I部「ローカルな伝統文化」、第II部「グローバル化時代の先住民社会」の2部構成となっている。

序章でマヤ地域全体について概説した後、第I部第1章で、グアテマラにおけるカトリック布教と、カトリックと並存する形で継承されてきたマヤ信仰について述べている。中でもカトリックの祭礼組織「コラフディア」に現存する非カトリック的要素に着目し、そして考察している。第2章と第3章では、カトリック改革派の歴史的背景・組織的活動・儀礼を報告するとともに、サンチアゴ市民が、後のプロテスタント布教の波にいかに対応していったかを考察している。第4章で、マヤ信仰の神々について、第5章では、先住民の神マシモンと下層ラディーノの神サンシモンについて分析している。

第II部では、第6章に、グアテマラの内戦終結と、和平協定締結後のマヤ語文化復興運動と、略奪された土地の奪還運動について、第7章で、マヤ女性が激動の時代に閉鎖的な村落共同体から出て、ナショナル、グローバル化の波に晒されながら、ジェンダー意識に芽生え、生き抜いていく様を描いている。最後に第8章と第9章で、マヤ先住民を含む中米諸国の人々が、アメリカ合衆国に移住し生活する状況を追っている。

長い歳月と社会変化の下でのマヤ先住民の意識の変容に迫る本書は、興味深い一冊である。

(村井友子)

松下冽 著

『現代メキシコの国家と政治：
グローバル化と市民社会の交差から』

御茶の水書房 2010年 469+xviページ

日本において、スペイン語圏諸国で最大のメキシコについての関心は高く、同国を研究する研究者数も多い。それにもかかわらずメキシコ政治を分析した日本語の学術書は極めて少なかった。本書は、メキシコを政治学的に分析した本格的学術書であり、まずその点を評価したい。

本書の課題は、メキシコにおける民主的ガヴァナンス構築を考慮しつつ、国家-社会関係を軸にメキシコの政治体制を通時的かつ共時的に分析しようというものである。こうした分析の核となるのが、権威主義クライエントリズムから多元主義的市民関係の間にあるセミ・クライエントリズムである。メキシコ国家は、民衆、特に貧困者を取り込んだクライアント型国家が形成されたが、それが1968年の学生・民衆運動で正統性の危機を迎える。その後自由化や競合的選挙の拡大とともにセミ・クライエントリズムや市民社会への移行が始まるという道筋を描いている。

本書は、第1部現代メキシコ政治システムの形成・発展変容と第2部グローバル化・脱権威主義・市民社会から構成される。第1部では1930年代の国家と労働関係、正統性の危機を内在した1970年代の国家と社会関係、PRI体制下における官僚制の形成に関する考察がなされている。第2部では、1980年代以降のグローバル化の下で、テクノクラートの影響力拡大、また社会扶助プログラム拡大に伴うテクノクラートの変容を論じている。つづいてサリーナス政権下における政党システムの再編、NFTA締結に伴う農業部門の大きな地殻変動を描き、貧困の拡大を批判している。最後にフォックス政権以降の国家-社会関係の変容、脱権威主義化および分権化と市民社会の相互発展に関して分析を行っている。現代メキシコに興味のある人には、一読に値する力作である。

(宇佐見耕一)

牛田千鶴 著

『ラティーノのエスニシティと
バイリンガル教育』

明石書店 2010年 262ページ

今日、情報、モノと共に、ヒトのグローバルな移動が顕著となっている。移動した人々は、移動先での文化的、エスニックなマイノリティであり、マジョリティに同化するよう圧力を受ける。彼ら自身も生活のため地位向上のために何らかの同化の必要性を感じると同時に、同じく生活や地位向上のため自らの文化や言語を維持、再生産する必要性をも感ずる。言語とその教育はこうした問題への対応が具体化する際の焦点であり、政策的、論争的なテーマとなる。

本書は、表題に関して、体系的な知識を与える日本語による唯一の書である。第I部では、米国におけるラティーノと呼ばれる集団が社会的にどのような規模、地位を持つか（第1章）、その歴史的形成（第2章）、彼らの呼称選択（「ラティーノ」か「ヒスパニック」か）と言語使用状況（第3章）が扱われ、第II部では、バイリンガル教育法制化の過程（第4章）、英語単一教育の復活（第5章）、バイリンガル教育の理論（第6章）が扱われ、第III部では、事例研究として、カリフォルニア州での「双方向イマージョン式」プログラム（第7章）、ニューメキシコ州のバイリンガル・多文化教育政策（第8章）、フロリダ州におけるイングリッシュ・プラス政策（第9章）が扱われる。

本書から改めてみてくることのひとつは、こどもの学力が、その属する社会階層、政治的・社会的環境に大きく左右されること、言語という変数は、そうした文脈の中においてみられるべきものであることであろう。なお日本においても、日系ブラジル人を中心に言語マイノリティが増大している。彼らに対する教育のあり方を評価・検討していく上で、この米国の事例は、著者がいうように、示唆を与えている。

(米村明夫)

丸山浩明編 著

『ブラジル日本移民一百年の軌跡』



明石書店 2010年 350ページ

1908年に始まったブラジルへの日本移民に関しては、2008年前後に100周年を記念して日本とブラジル双方でさまざまな書籍が多数出版された。本書もタイトルの如く軌を一にするものであるが、その内容は、両国の移民研究者により2008年10月に立教大学で開催された国際会議「ブラジル日本人移民100年の軌跡」での発表研究や議論を基にしている。また、冒頭部分をはじめ本書の随所に日本移民に関する写真などが多数掲載されている。したがって本書は、ブラジルの日本移民や日系社会に関する学術書としてはいうまでもなく、一冊の資料書としても非常に高い価値を有する書だといえる。

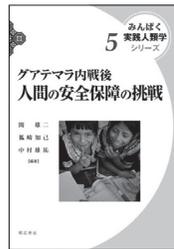
全部で13の論考から構成される本書は、第一部「ブラジル日本移民研究の回顧と展望」(3論考)、第二部「ブラジル日本移民史・日系社会史」(5論考)、第三部「ブラジル日本移民関係史料とデジタルアーカイブ」(5論考)に大別される。第一部は、ブラジル日本移民に関する先行研究や議論、それらの変遷などを詳説するもので、同分野の研究の成果や動向を知る上で非常に有益である。第二部では、日本側から始まる移民の歴史が移住地の事例研究や豊富なデータなどとともに論じられており、全体史だけでなく個別史からも日本移民や日系社会をより深く理解することができる。第三部は、ブラジル日本移民の貴重な資料を紹介するとともに、その保存や公開の重要性について説いたもので、ブラジル日系社会や移民・エスニシティ研究の今後にとって意義深い内容となっている。

編者が「はしがき」で述べているように、「ブラジル日本移民について多角的・包括的に議論を行い、将来に向けて新たな移民研究の視角（中略）を具体的に提案したものは見当たらない」。評者もこの見解に同感であり、本書を切掛けにブラジルの日本移民や日系社会の研究がさらに発展することを願いたい。

(近田亮平)

関雄二, 狐崎知己, 中村雄祐 編著

『グアテマラ内戦後：人間の安全保障の挑戦』
みんなく実践人類学シリーズ 5 巻



明石書店 2009年 278ページ

本書はアマルティア・センをはじめとする最新の貧困にかかわる研究成果を参考に、紛争後の社会の再建に関し、研究者の知的貢献を目指すという立場から、グアテマラの事例を扱ったものである。第1章は、困難の中で粘り強く人権侵害の告発を続けるモスコソ氏が、人権侵害の告発に成功した数少ないケースであるリオ・ネグロ村の問題を取り上げる。第2章(関)では、同様に虐殺が起きたパンソス村に建設された虐殺の記憶装置としての博物館において、担い手がおらず活動が停滞し、政治的理由で展示物が倉庫に撤去された事例を取り上げ、人権侵害の記憶の維持拡大の難しさを述べる。

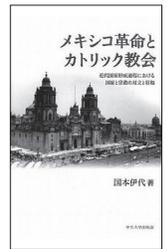
第3章(浜下, 久松, 上岡)では、スペイン語を解さない先住民人口が多いグアテマラでの二言語教育の実態と海外協力について述べ、第4章(狐崎)では、和平後の復興の国際協力の評価を行う。軍部の抵抗、記録の散逸や不存在、内戦中に分断された社会の対立などが、犠牲者の生活保障や真相究明への努力を阻んでいることが、具体的な事例を通して語られる。結びでは日本の国際協力が少しずつ実を結びつつあることが述べられている。第5章(中村)では具体的に、国際協力機構(JICA)による日本での指導者研修の様子が描写され、第6章(根本)では、伝統的作物であるアマランサスが、日本をはじめとする国際社会の協力を得て復活しつつあることを指摘し、その歴史と現状を述べたものである。

淡々と述べられているものの、虐殺の具体的描写はしばしば読み進むのが困難になる。しかしグアテマラの現実、ラテンアメリカの植民地時代の遺制を色濃く残す典型例といえよう。内戦が終わって10年以上たつが、復興のための努力が忍耐強く続けられていることを知ることは、希望の光を見る思いでもある。一読を勧めたい。

(山岡加奈子)

国本伊代 著

『メキシコ革命とカトリック教会
—近代国家形成過程における国家と
宗教の対立と宥和—』



中央大学出版部 2009年 iv+426ページ

メキシコにとって、今年(2010年)は独立から200年、革命から100年という特別な年である。そこで、本書はメキシコ概史を知る人がさらに踏み込んでその現代史を学ぶに必読の書である。

本書の中心である第II部では、メキシコ革命期にカトリック勢力がとった反革命的姿勢、これに対する戦時における革命勢力の対応、戦後の憲法制定議会の対応(議員達のプロフィール、反教権主義的規定の審議、制定過程)が論じられる。著者は革命の激しい反教権主義の原因を、先行文献を渉猟、批判し、あるいは一次資料にあたりつつ解明していく。

第III部では、憲法制定後の反教権主義とカトリック勢力の対立と妥協が扱われる。対立はクリステロスの反乱において極に達するが、アメリカ大使仲介の和平協定後は、憲法規定を基本としながらも、一定の妥協が行なわれたこと、1980年代以降カトリック教会が、人権問題に関して発言する民主化勢力の一部として力を持つようになってきたことを背景として、1992年に反教権主義的規定の憲法からの削除に成功したことが述べられる。

本書の魅力は、通説に対する批判ばかりではなく、あるいはそのための実証的な姿勢ばかりではなく、それが示唆するメキシコ史のより合理的な理解にある。「ディアス期のカトリック勢力の復権」という定説への本書第3章の反証によって、メキシコが集権性を備えた近代国家へと進む過程におけるディアス独裁の重要性がより明瞭になったといえる。またクリステロスの反乱の2つの時期についても、そうした近代国家の確立という観点から、よりの確な性格づけが示されている。もちろん謎に包まれた歴史的ダイナミズムがすべて解明されることはあり得ないことだろうが、本書がそれに迫る楽しみを味あわせてくれるものであることは確かだといってよい。

(米村明夫)

駒井洋監修、中川文雄、田島久蔵、山脇千賀子 編著
『ラテンアメリカン・ディアスポラ』
叢書グローバル・ディアスポラ 第6巻



明石書店 2010年 296ページ

グローバル化の進展とともに、国境を超えた人の流れも急激に増大している。ラテンアメリカのディアスポラとは、本書によれば、(1)国境の移動や宗主国の変化によるもの、(2)政治体制の変化によるもの、(3)内戦・暴力の蔓延によるもの、(4)経済機会の追求によるもの、(5)知識人、専門職、芸術家の文化的ディアスポラの5タイプがあるとされる。移民受け入れ国としての歴史が長いラテンアメリカであるが、近年はより良い経済機会を求めて、文化的にも距離的にも離れた先進国への出移民が増加している。

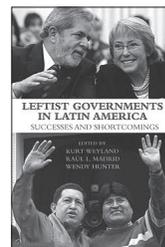
本書の構成は国別各論が中心である。序章(中川文雄)でラテンアメリカ全体の移民の歴史が概観された後、第1章から第6章までそれぞれ米国のヘゲモニーから近い順に、プエルトリコ(志柿光浩、三宅禎子)、キューバ(山岡加奈子)、メキシコ(吉田栄人)、ペルー(山脇千賀子)、アルゼンチン(セシリア・オナハ、シルビア・ゴメス)、ブラジル(田島久蔵、アンジェロ・イシ、山田政信)について順に分析がなされ、終章(山脇千賀子)で移民送り出し国としてのラテンアメリカと、移民先の先進国での彼らの生活をまとめている。移民先は、第1章から第3章までは主として米国が取り上げられ、その同化の過程を中心とした記述が行なわれるのに対し、第4章から第6章では日系人を中心に日本への移民が増加していることから、米国とともに日本も取り上げられている。

アプローチは人類学的、歴史学的、社会学的とさまざまであるが、現地を知る筆者により各章が担当されており、各国のディアスポラの直面する問題がしばしば臨場感を伴って描写され、専門的な知識がなくとも楽しんで読める内容となっている。

(山岡加奈子)

Weyland, Kurt, Raúl L. Madrid, and Wendy Hunter eds.

Leftist Governments in Latin America: Successes and Shortcomings



New York: Cambridge University Press.
2010, xv, 216p.

本書は、著名なラテンアメリカ政治学者らによる、「左傾化」を中心に扱った論文集である。まず第1章で「左傾化」をめぐる概念のおよび理論的な問題が論じられ、第2章から第6章にかけて、「抗争的な左派」の象徴であるベネズエラとボリビアの事例、および「穏健な左派」の代表格であるチリとブラジルの事例がそれぞれ扱われる。そして最後の第7章において、上記2種類の「左派」を対照させつつ、各政権の政治・経済・社会的なパフォーマンスの相違や問題点が指摘される。

今や「左傾化」について論じる際に、「二つの左派」を対照させるやり方は最もありがちな手法であるが、まさにある推薦者が裏表紙で指摘する通り、本書のユニークさは、「リベラル」な編者たちが、穏健左派という「特定のタイプ」の左派政権こそが、市民にとってより良い結果を生み出すことを言明している点である。が、経済/社会指標に基づくパフォーマンスの善し悪しのつけ方にはおおかた賛同できるものの、紹介者としては、とりわけ「民主政治のパフォーマンス」を論じた部分には少し違和感を持つ。むしろ、編者ら同様、「急進左派」政権下における執政府への権力の集中(および立法府・司法府の弱体化)や野党・反対派の取り扱いについては大きな懸念を抱かざるを得ない。しかし、信頼できる世論調査が明らかにする、同じくこれらの国々の市民の間で「民主主義への満足感」が高まっているという事実、一方、「穏健左派」政権下ではこうした満足感が低下し、国民の政治的疎外感が強まっているという事実も、編者らが考える以上に、それぞれの国での民主政治の在り方や「質」には重大な意味を持っているといえるだろう。

(上谷直克)